
ぶっ壊レイハさん

tapi@shu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶっ壊レイハさん

【Nコード】

N1501P

【作者名】

tapi@shu

【あらすじ】

縁側で鼻歌を歌ってたなのの下に、謎の物体が落ちてきた!?!? 暇つぶしに書いた一話完結の作品の一つです。お気楽にお読みください。

「ふーん、ふーん、ぶーん」

綺麗な茶色い髪をサイドポニーのように結わいている少女が一人、庭の縁側で能天気にな鼻歌を歌っていた。

その様子はどこかほのぼのとしていて、その茶色い女の子の雰囲気
気にピッタシだった。

「天気いいな」

少女、高町なのはは地面に着かないほど短い足を、ぶらんぶらんとしながら空を見え上げて、呟く。

空はまるで海と見間違えるほど青く、澄み渡っている。そんな空
の中で太陽はサンサンとして、まさにお昼時！ といった感じである。
時計を見ればすでに12時を指していた。

それでもなのははどこかその空を憧れのような眼差しで見ながらも、
気分よく変わらず鼻歌を歌いながら空を見ている。

「気持ちー、お昼寝しようかなあ」

あまりの気持ちよさに若干うとうとし始める。

だけど、お昼寝をしたら夜に寝れなくなってしまいうので必死に眠気を抑える。

以前についてお昼寝をしてしまい夜寝れなくなり、喫茶店のお仕事から帰ってきたなのは母親の桃子に呆れながら怒られてしまったのを思い出すと、少し眠気がとんだ。

ただ、その怒られた後に母親に歌を歌ってくれたのも思い出し、あの歌が聞けるなら少し寝ちゃってもいいかなーなんてなのは思ってしまう。

そういえば最近、お母さんと一緒にいる時間が少ないなあと日々を思い返す。

父親の士郎が怪我をして、その看病と仕事である喫茶店の経営をしなければならぬのだから、なのはと関わる時間が減ってしまうのは無理も無い事である。同様に、姉の美由希と兄の恭也との時間も減ってしまっている。

なのははまだ幼いにもかかわらず家族に甘えたいにもかかわらず我が儘を言っちゃいけないと、家族を思うが故に考え、それはしょうがない事であると心で位置づけていた。

そして、今日からは春休みで幼稚園も無く暇だったので縁側に出て、誰の邪魔にもならないようにこうやってのほほんとしていたのである。

「お外はぽかぽかで気持ちー！」

うーんと、精一杯にからで背伸びをして、太陽の暖かな日差しをこれでもかと気持ちよく浴びる。

なのははこう見えて、マイペースだった。確かに家族のみんなとあまり時間を取れないのは少しながら寂しいと感じるものの、この家の危機でみんなで一丸となって頑張っていると考えると、そこはとなく一体感を感じ、孤独感は不思議と無かった。

「ふぁー、こういうところで寝たくなる猫さんの気持ちが分かるよ
お」

気持ちよくてあくびが出てしまい、目を片手で擦りながら猫の気持ちを感じ取る。

ついで「ごろにゃー」と猫の真似をしてみる。ついでに、ごろごろーと芝の上を転がってみる。

（あ、猫さんの真似癖になりそう）

猫の真似はどことなくなのはのお気に入りになった。でも、人前で「にゃー」なんていうのは恥ずかしいので、一人でいる時だけにしようと心の内に決めておく。

庭の芝の上で、仰向けになって三度空を見上げると、一つの黒点
がなのはの目に入る。

「んー？ あれってな――」

言葉を発しようとしたが、なのはののんびり口調の言葉よりも早
くその黒点は徐々に大きくなり、

「――いたっ！」

なのはの額にぶつかった。

普通に考えれば、物が落下して額にぶつかれば「いたっ！」で済
むはずも無いのだが、どこからともなくまるでワープのように現れ
たそれは、幸いたいした高さから落ちてきたわけではなかったよう
で、なのはは痛いと思う程度の怪我で済んだのである。

「痛いよー」と、なのはは痛さのあまりに出た涙を手で拭いなが
ら、その落ちてきた物を見る。

その落ちてきたものは、赤い石のようなものだった。

なのはは珍しそうな物を見る目で、じーっと赤い石を見つめる。
触るのが怖いのかしゃがんでただひたすらにじーっと見つめていた。

するとどこからともなくなのはの耳に声が聞こえてきた。

《Oh... crazy...》

どこか嘆いているような声だった。

これが高町なのはの出会いとなった。



《I'm ええと... INTERIJENTODEBAISU.
Are you ok?》

とてもじゃないが英語は最初のアイムと最後のアユーのくだりしか合っていないのに、どこか自信たっぷりな赤い宝石は自己紹介を始めた。というか、アイムの後は完全に日本語だった。しかも日本人特有の間を取ったり話す事を考えるときのセリフ。

その宝石から人間臭さというよりは、日本人臭さを感じる。

なのはは若干訝しげにその赤い宝石の言葉を聞きながら必死に解

読を試みる。

たぶんこれって英語だね？　なんとなく分かったかも！
と少し内心ではテンションは上がるものの、出た言葉はまるで自身の無い答えを答える口調になった。

「インテリジェントデバイス？」

《Yes! Yes!》

ここぞとばかりに外国人らしい？　フレンジーシップな雰囲気
をどこか感じるような、言葉を発する赤い石。しかも、どこことなく
テンションが高そうである。

この石がもし人ならば、なのはの手をとってぶんぶんと振り回し
ている様子がありありと浮かぶ。

そんなテンションの高いしゃべる謎の石とは違い、なのははほっ
と胸をなでおろす。同時にちよっと嬉しくなる。

（わ、私英語分かったやつたよっ！）

赤い石のそれは決して英語とはいえない代物だったが、幼稚園で
遊び程度で英語を教わっているなのはには、分からない事である。

確かに英語翻訳が幼稚園児が出来れば自慢できるものだろうが、

石の発したものは英語なんてちやなもんじゃない。

もはや、ミッドチルダ語なんていうものですらすでになく、ある意味ではなのは英語よりも難解のものを解読できたので、その喜びは全く見当違いというわけではなかった。

それは兎も角として、赤い石は自己紹介を続けた。

《My name is レイジングハート!》

「レイジングキャノン?」

赤い宝石は自身の名前を如何にも英語っぽく発音したため、もちろんそれでも英語とは程遠いもので、そのせいかなのは上手く聞き取れなかったようだ。

《No... no... no... あー、レイジングハート!》

「あ、分かったよ。レイジングハートでしょ?」

《God job! You are best master!》

レイジングハートと名乗った赤い石は、なのはに賞賛の言葉を言う。そして、その勢いままにマスターと彼女を呼んだ。

レイジングハートは意外とノリと勢いの生き物? のようだ。そ

それは今までの発言からなんとなくそれとなく分かるが、果たしてそんな簡単なノリ、男子高校生のようなノリでマスターと呼んでしまっているのか。

まあそんなのはレイジングハートの自由である。彼女？　は自由気ままに生きる種なのだろう。

こうして、どこか能天気でのほほんとしているのはと、フリーダムという意味を悪い意味で有効活用している、あるいは都合のいい意味で活用しているレイジングハートとの奇妙な生活が始まった。

（後書き）

少しでも読者の皆さんの暇つぶしになれば。
マテリアルが本日投稿できないため、代わりの作品でもあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1501p/>

ぶっ壊レイハさん

2010年11月27日17時11分発行